

献血、高校の実施率2割以下に

若い世代の献血が減っている。日本赤十字社によると、10〜30代の献血者数は2013年の約242万人から22年には約168万人になり、10年間で3割も減った。

少子化で若者の人口自体が減っていることが大きい。高校などでの学校献血が減っている影響も見逃せない。献血未経験層がさらに積み上がると、将来、献血が危機的な状況を迎える恐れもある。

1990年ごろまでは全国の高校の6割以上で学校献血を実施していたが、2000年代には3割を切

り、20年以降は新型コロナウイルスの影響もあって2割以下にまで落ち込んでいる。減らしては意識の変化が理由として挙げられているが、め、全血献血は400ミリリットルが200ミリリットルから400ミリリットルは年齢条件が16歳とも関係しているようだ。以上なのに対し、400ミ

風紋



献血をする10代の若者は減っている（2023年、大阪市住吉区の清明学院高校）

若者時代の経験、将来左右

18歳以上、女性18歳以上だ。400ミリリットルだと高校献血で女子は18歳の3年生しか参加できない。「参加者があまり見込めないためやめるケースも出た」と大阪府赤十字血液センターの恵比須有実子さんは話す。

1回の献血量を増やすのは理にかなっていたが、献血可能年齢で生徒が「分断」され、全校行事の高校献血自体が減ってしまったとしたら残念なことだ。

献血は社会の変化も映し出す。企業の合併や事業所の統廃合、推進役だった組合の弱体化で集団献血をやめるケースもある。「意思決定する部署が東京に移って献血がなくなるなど、東京一極集中を実感することもある」と恵比須さん。

大阪市住吉区の私立清明学院高校は20年、生徒からの提案で新たに学校献血を始めた。コロナ禍で文化祭や体育祭が中止になる中、生徒会が「何か皆で取り組む社会貢献がしたい」と話

し合い、献血の話が出てきたという。「地域の人にも参加してもらおう」という声も上がり、周辺の住民にも協力を呼び掛けた。

生徒は日赤の担当者から事前に献血について学んだ。当日は大教室にベッドを並べ、希望者に来てもらう形で実施。100人程度が参加した。21年以降も毎年秋に住民にも参加してもらう形で継続している。

献血を担当してきた横山史典教諭（58）は「生徒が自発的に始めたことがうれし。教職員も年配の人は参加するが、一度も経験のない若い先生には抵抗感がある。高校時代に経験する意義は大きい」と話す。

一人ひとりの自発的な参加に頼らざるを得ない献血だが、未経験者が何のきっかけもなく協力を始めるとは考えづらい。高校時代の献血体験をいかに増やすか、未経験世代が40代以上の層に広がる前に対策を考えねばならないだろう。

（堀田昇吾）